

IAUD Newsletter vol.3 第8号 (2010年11月号) 目次

1. 特集：「第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 in はままつ」速報
 ～人と地球のためにー持続可能な共生社会の実現へ向けて～ 1
2. 世界のUD動向：スティグマデザインからの解放
 ～「REHACARE International 2010」の視察を通じて～
 「第5回ユニバーサルデザイン全国大会」、「include2011」開催ほか 20

※今月号は国際UD会議特集のためIAUD会員の取り組み紹介およびCaseStudyはお休みさせていただきます。

浜松市で開催された国際UD会議が5日間の全プログラムを無事に終え閉幕しました。開会式当日は台風14号接近により、参加者の足への影響が心配されましたが、大きな天候の崩れもなくIAUD 総裁 寛仁親王殿下のご臨席のもと予定通り開会式が開催され、会議がスタートしました。メイン会場となったアクトシティ浜松のコンgresセンターとイベントホール、「48時間デザインマラソン」のワークショップが行われた静岡文化芸術大学の周辺は世界38カ国・地域から集った参加者や静岡県民のUDへの思いに包まれていました。本誌では今月と来月の2号にわたり、その模様をお伝えします。今月号では充実した会議プログラムの全体概要を、日を追ってご紹介します。

特集：

「第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 in はままつ」速報

～人と地球のために 持続可能な共生社会の実現へ向けて～



開会式では山本組織委員長による開会の辞により会議がスタートしました。



第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議
2010 in はままつ

The 3rd International Conference
for Universal Design in HAMAMATSU 2010

- <開催概要> テーマ：人と地球のために—持続可能な共生社会の実現へ向けて
日 程：2010年10月30日（土曜日）～11月3日（水曜日・祝日）
場 所：静岡県浜松市・アクトシティ浜松、静岡文化芸術大学ほか
参加者：合計 延べ約14,110名
会議登録者数：延べ約1,500名（公開シンポジウム参加者含む）
展示会来場者：延べ12,610名

10月30日（土曜日）

開会式

台風14号接近による影響が心配されましたが、雨模様ながら予定通り国際会議がスタートしました。開会式はメイン会場であるアクトシティ浜松・コンgresセンター大ホールにて、IAUD 総裁・寛仁親王殿下ご臨席のもと、各界から来賓をお招きして開催されました。国際UD会議の組織委員会会長として山本 IAUD 会長からの開会の辞（表紙写真）に続き、総裁よりお言葉をいただきました（右写真）。



来賓のご挨拶として村木厚子内閣府政策統括官（共生社会政策担当）が岡崎トミ子 国家公安委員会委員長・内閣府特命担当大臣（消費者及び食品安全、少子化対策、男女共同参画）のメッセージを代読されました。それに続き、川勝平太静岡県知事、鈴木康友浜松市長から開催地を代表して歓迎のご挨拶をいただきました。

写真左より村木厚子内閣府政策統括官、川勝平太静岡県知事、鈴木康友浜松市長



公開シンポジウム（一般公開プログラム）

記念講演：川勝平太（静岡県知事、前静岡文化芸術大学学長）

UDにより地域の発展と文化の向上に貢献する人材の育成を目指す静岡文化芸術大学の元学長であり、今回会議の組織委員も務められている川勝静岡県知事が、開催地を代表して講演され、UDに通じる静岡県の精神風土や歴史的・文化的背景などが紹介されました。



基調講演1：「1/4の奇跡」

山元加津子（石川県特別支援学校教諭/作家・エッセイスト）

平成19年から氏をテーマにした映画「1/4の奇跡」「宇宙(そら)の約束」が続けて制作され、全国600ヶ所以上、海外25ヶ所以上で自主上映されていますが、話すことができなかった教え子の女の子が奇跡的に話し始めるエピソードなど感動的な講演でした。



基調講演2：「第7の敵」 ロナルド・ヒギンス（作家/英国）

世界の安全保障問題をテーマにした執筆、講演活動を行っているフリーランスの作家。講演の中で、人類は人間の心の中にある「第7の敵」である「冷淡」「非情」「無関心」などの内なる敵と真剣に向き合わなければならないと警告されました。



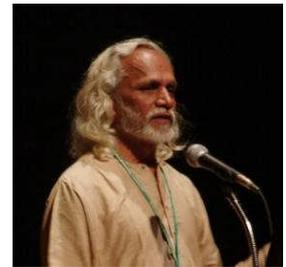
パネルディスカッション：「人と地球の未来のために」



先進国と途上国・第三世界とのUDの状況の違いなど、パネリスト4名のそれぞれの立場から言及し、将来に向け解決の糸口をいかに見つけ、行動していくかが議論されました。困難が伴うテーマに対して会場参加者からも、厳しい現実に対しデザイナーの果たすべき役割について質問が寄せられました。

<パネリスト>（下写真左より）

パトリア・ムーア（ムーアデザインアソシエイツ代表/米国）、**ジム・サンデュー**（ノーサンブリア大学名誉教授/英国）、**トマス・バーデ**（ユニヴァーサルデザイン協会代表/ドイツ）、**シンガナパリ・バララム**（DJデザインアカデミー教授/インド）



併設展示会・内覧会 ※展示会については来月号でもご紹介する予定です。

イベントホールでは午後からの一般公開に先立ち、併設展示会の内覧会が行われました。



10月31日（日曜日）

本会議がスタートし、11月3日まで、大ホールでの全体セッションと、分科会として3会場において34セッションが行われ論文が発表されました。また、特別ワークショップとして IAUD の顔ともなってきたユーザー参加型ワークショップ「48時間デザインマラソン」（メイン会場：静岡文化芸術大学、詳しくは13ページをご覧ください。）と、特別展示「世界を救うデザイン」と連動した「World Cause ～そろそろ Cause の話をしよう～」が開催されました。その他各種アワードやコンテスト表彰式、映画上映などが行われました。ポスターセッションも11月2日までの3日間にわたり日替わり行われました。

全体会議 多様性の包摂



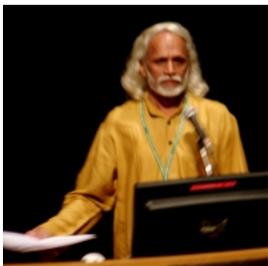
人間の多様性を理解し、できる限り包摂することがUDの基本ですが、いかなる人も不当に排除されることのない社会を構築するためにデザインは何をすべきか。欧州とインドから二人の講演者を招いて、それぞれの視点から課題認識と解決に向けた提言が行われました。



<講演者>

ジム・サンデュー（ノーサンブリア大学名誉教授/英国）

海外のデザイナーがインドでデザインすべきことを語っても、生活レベルが違いすぎるために議論がかみ合わず、有効な解決策につながり難い。まずデザイナーが実態を理解し生活水準を引き上げることから始める必要がある。それを踏まえてデザインの議論があると考えたと述べられました。



シンガナパリ・バララム（DJ デザインアカデミー教授/インド）

インドは急速な発展を遂げているが、工学部と比較するとデザインを教えている大学は非常に少ない。これからの経済成長を考える場合、インドで育った、もっと多くのデザイナーが必要で、そのためのデザイナー教育を強化すべきである。インドのデザイナー教育について、海外からもその必要性を強く訴えて欲しいと述べられました。

基調講演・報告「世界を救うデザイン」

<講演者>岡田仁孝(上智大学国際教養学部長)「企業が貧困削減に向けてできること」

活動する国・地域に貢献できない企業は大きなリスクを負う。ISOでも人権・CSRの視点から企業のあり方の基準を示そうとしている。CSRやBOP（貧困層を対象とした経済活動）に対しては、経済原理だけでなく普遍的な視点が重要であると言及されました。

<講演者>本村拓人（株式会社グランマ代表取締役社長）「世界を救うデザイン」



現地で作れる30ドル以下の義足を提供する活動が紹介され、「自尊心や生きがい」を提供することが大事で、そのためにはCAUSE（社会的要求）に焦点をあてる必要がある。「世界を救うデザイン」のためには、現地の生活理解、生活課題と国際社会の関心の両立、現地でのビジネス・デザインの3点が重要であることが言及されました。

特別講演・報告（一般公開プログラム）

「地雷原を農地に」地雷除去に挑む 豊かで平和な大地への復興～大地よ蘇れ～

＜講演者＞雨宮 清（山梨日立建機株式会社代表取締役社長）



地雷被害により全世界で年間2万6千人が死傷しているが、雨宮氏が開発した地雷除去機は、安全に効率的にそして迅速に地雷を処理する画期的な機械で、既に世界8カ国で75台が稼働しています。「技術は物づくりの挑戦者であり、技術の根源は物づくり、人づくりにある」と結ばれました。地雷除去機は併設展示会場で実機が展示されました。



パネルディスカッション（一般公開プログラム）

持続可能な共生社会の実現に向けて Part 1～政治の役割～



これまでの官僚主導による行政の弊害を、政治(国民)主導により変革してゆくことが求められています。UDは全省庁にまたがる政策理念であるため、閣僚(政治家)のイニシアチブと省庁間の連携が必要とされる場所ですが、このセッションでは現職議員と鈴木浜松市長をパネリストに迎え、施策ヴィジョンが語られました。

＜コーディネーター＞岡本（IAUD 評議員会議長/トヨタ自動車株式会社取締役副会長）

＜パネリスト＞（下写真左より）

塩谷 立 衆議院議員、大口善徳 衆議院議員、市村浩一郎 衆議院議員・国土交通大臣政務官、鈴木康友 浜松市長



分科会（12セッション）：まちづくり(1)・(2)、家電・住宅設備(1)・(2)、UD政策、パッケージデザイン、法律・法令、公共トイレ、子供のためのデザイン、環境・エコロジー、歩行空間、UD理念

ポスターセッション

研究事例がポスターにて日替わりで展示されました。



特別セミナー（ランチョンセミナー）



TOTO 株式会社 「TOTO のものづくりの取り組み」

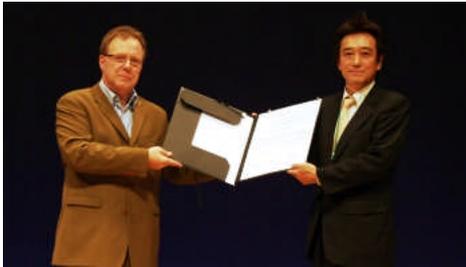
持続可能な共生社会の実現に向け取り組んでいる環境への配慮やUD 研究所で「UD サイクル」によって生まれた商品開発事例が紹介されました。



株式会社乃村工藝社「眼球運動測定装置（アイカメラ）での調査による展示設計のユニバーサル化」

長崎歴史文化博物館で実施された来場者の調査結果をもとに、サービスを受ける側の視点に立って施設計画、運営サービスを考えることの重要性が示されました。

ドイツユニバーサルデザインアワード表彰式



IAUD の活動に対してドイツユニバーサルデザイン協議会よりアワードを受賞、トマス・バーデ代表より成川 IAUD 理事長に表彰状が授与されました。

こども UD コンテスト表彰式（一般公開プログラム）



浜松市と IAUD が主催、小・中学生を対象にした UD の考え方でまちをさらに住みやすくする作品コンテストの表彰式が行われ、受賞作品が発表されました。

UD 映画鑑賞会（一般公開プログラム）「1/4 の奇跡～本当のことだから～」



公開シンポジウムで基調講演された山元加津子さんをテーマにしたドキュメンタリー映画が上映されました。画面の字幕に加え、音楽や音を手話や動作、絵などを使って表現する「ミュージックサイン」により文字だけでは伝わり難い、音楽の情感や雰囲気も伝えられました。

特別ワークショップ「World Cause ～そろそろ Cause の話をしよう～」

結果としてのプロダクトやデザイン性ではなく、その課題が生まれてきた背景を学ぶことをねらいとしたワークショップが、蓮沼孝（榎ロバート・ラスムセン・アンド・アソシエイツ 代表取締役社長）氏の指導のもと開催されました。

11月1日（月曜日）

特別講演

旅と観光のUD 1



世界遺産を有する観光地から特に有力な観光資源のない小さな「まち」まで、世界的な人口の高齢化を背景として、人の生活を豊かにする「旅と観光」領域におけるUDの重要性が増してきており、世界各地でさまざまな取り組みが行われている。2氏により日本とドイツ/欧州の事例が紹介されました。

<講演者>（左写真上から）

秋山哲男（日本福祉のまちづくり学会副会長/早稲田大学非常勤講師）

ピーター・ノイマン（ノイマンコンサルタント代表/ドイツ）



旅と観光のUD 2



スペイン第2の都市バルセロナは、UDに注力している観光都市としても知られている。フランセスク・アラガイデザインフォーオール財団代表（スペイン）はバルセロナ市、カタルーニャ自治州と連携して実現した事例紹介を通して課題共有化と今後の展望が示されました。

川内美彦東洋大学教授は、建築コンサルタントとして、バリアフ

リー設備の不法改造で社会問題となったホテルのUD対応の内容を解説しながら、ホスピタリティや「おもてなし」の概念への考察が行なわれました。



基調講演・報告 持続可能な社会の構築へ向けて

持続可能（サステイナブル）な社会を実現するためには、地球環境保全を考慮した循環型社会ということだけでなく、人権や人間性の尊重を考慮しつつ世代間の継承を進め、持続的に発展できる社会という概念へ広げていく必要がある。人口爆発や食料の欠乏、および資源の枯渇等から引きこされる国際紛争、貧困等のグローバルな課題にもUDの観点からの解決策提示が期待されま



<講演者>（写真左から）

パトリア・ムーア（ムーアデザインアソシエイツ代表/米国）

益田文和（東京造形大学教授）

パネルディスカッション

アジアのモビリティ 1



シンガポール、台湾、そして日本のモビリティの現状に関する意見交換を通して、言語、社会体制、文化、生活習慣の違いを超えて経済成長を続けるアジア圏におけるUDの今後の課題解決に向けて意見交換が行われました。

- <パネリスト> イサ・ビン・カマリ (シンガポール国土交通局部長/シンガポール)
呉 可久 (国立台北科技大学准教授/台湾)
秋山哲男 (日本福祉のまちづくり学会副会長/早稲田大学非常勤講師)
- <コーディネーター> 川内美彦 (東洋大学教授)

特別報告

アジアのモビリティ 2



シンガポールと台湾のモビリティの現状に関する詳細報告が行われました。パネルディスカッション「アジアのモビリティ 1」では伝えきれない具体的な事例を解説し、専門的な議論が展開されました。

- <講演者> (写真左より)
イサ・ビン・カマリ
(シンガポール国土交通局部長/シンガポール)
呉 可久 (国立台北科技大学准教授/台湾)

パネルディスカッション

裁判のUD

昨年5月に裁判員制度がスタートし1年半が経過したが、パネリスト3氏から検討裁判の現場の実態や新制度の検討プロセス、導入後の意識の変化、新たに見えてきた課題、今後の改善に向けての動きなどが紹介された。障がい者対応に関しては検討中という状況のまま大きな進展が見られないが、視覚・聴覚障がい者でも陪臣員として安心して参加できるよう抜本的な改善が望まれます。



- <パネリスト> (上写真左から)
安原 浩 (弁護士/元松山家庭裁判所所長)
布施久美子 (札幌高等裁判所速記官)
山根香織 (主婦連合会会長)



- <コーディネーター> 蔦谷邦夫 (富士通デザイン株式会社)
テーマに関連した参考情報として今回の会議で提供された情報保障の概要が紹介されました。

パネルディスカッション

市民の社会的責任

日本の企業はCSRに関しかなり積極的に取り組んでいるが、消費者や市民の一人ひとりが社会の問題に関心を持って取り組むためには教育を考えていく必要がある。子供から親へ広げていくことは大変有効で、子供のころから社会活動に参加し、皆で考えて行動することが大切である。そのためにはもっと市民の力を活用するべきである、などの意見交換が行われました。



<パネリスト>(右上写真左から)

杉浦政紀 (市民代表)

フランセスク・アラガイ (デザインフォーオール財団代表/スペイン)

サラ・ホラック (オピニオンリーダーリサーチ社取締役/英国)

内田宏康 (NPO 法人福祉のまちづくり市民ネットワーク専務理事)

<コーディネーター>高橋陽子 (日本フィランソロピー協会理事長 左写真)

IAUD セッション

IAUD アワード表彰式

選考委員会の審査により発表済みの優秀賞4件から大賞が選考され、大賞には独立行政法人国際協力機構とフィリピン国家障がい者協議会の「フィリピン国内の地方における障がい者のためのバリアフリー環境形成プロジェクト(障がい者に優しいまちづくり)」が選ばれました(左写真)。優秀賞は「ドコモ・ハーティストイル」の推進(株式会社NTTドコモ)、「五感で感じるユニバーサルデザイン」建築空間での展開~南アルプス市健康福祉センターでの試み(株式会社日建設計)、「公共交通利用における移動支援情報の提供システムモデル構築」(NPO法人まちの案内推進ネット)の3件でした。表彰式に続いてロジャー・コールマン審査委員長による講評、受賞者のプレゼンテーションが行なわれました。



IAUD の研究活動の紹介



布垣研究部会副会長による研究部会の活動概要紹介に続いて、IAUD 研究部会の8つのプロジェクトおよびワーキンググループから活動報告が行われました。

※詳しい内容は来月号に掲載の予定です。



余暇の UD プロジェクト



標準化研究ワーキンググループ



労働環境プロジェクト



移動空間プロジェクト



住空間プロジェクト



衣の UD プロジェクト



食の UD プロジェクト



メディアの UD プロジェクト

分科会 (11 セッション) : 情報デザイン(1)・(2)・(3)、建築計画(1)・(2)・(3)、人間工学/エルゴノミクス、住宅(1)・(2)、モビリティ(自動車)、障害者のためのデザイン

11月2日(火曜日)

基調講演・報告

ノルウェーの UD



<講演者>

オンニ・エイクハウグ (ノルウェーデザイン協議会代表/ノルウェー)

「境界を押し広げ、国の考え方を変える」

ノルウェーでは15年間で交通、建物、WebやIT機器などすべての面でUD化するという国家プロジェクトが進められている。その他、ノルウェーデザイン協議会や民間での取り組み事例が紹介されました。



<講演者>

ディータ・シアウ (ノルウェー視覚障害者協会/ノルウェー)

視覚障がいを持つキュレーターとして、ユーザー視点のさまざまなアートイベントや取り組みを通じての気づきや考慮すべきポイントが紹介されました。

デンマークの UD



＜講演者＞磯村 歩（株式会社グラディエ代表取締役社長）

「デンマークの多様性受容と自己決定権」

日本人の目から見たデンマークの先進的な取り組みが紹介された。福祉など国の支援に目が行きがちだが、子供のころから個人の自己決定を重視して自由に遊ばせることが自分の意識を明確にする力を育てていると考察され、日本も学ぶべき点が多いと述べられました。



＜講演者＞カリン・ベンディクセン（ベックスコム代表/デンマーク）

「デンマークの視点:デザインフォーオール～引き返せない限界点」

磯村氏が紹介するようなデンマークを支える政府の施策、ユーザー参加による62のイノベーション・プロジェクト User-Driven-Innovation や高齢者のためのいす開発のプロジェクト i-Sit などの事例が紹介されました。

ドイツの UD



＜講演者＞トマス・バーデ（ユニヴァーサルデザイン協会代表/ドイツ）

「果てしない物語…もしくは全体論的方針を信ずる」

iF 賞やレッド・ドット賞等、高品質なデザイン製品のセレクションに定評のあるドイツに、2008年よりあらたにユニヴァーサルデザイン賞が登場。主催のユニヴァーサルデザイン協会からドイツの最新UD事情が報告されました。今回、同協会は併設展示会でもブースを出展しました。

米国の UD



＜講演者＞ヴァレリー・フレッチャー（人間中心デザイン研究所所長/米国）

「米国の視点、動向と機会」

1985年にUDの用語と概念を創出、UD7原則の定義も提唱するなど、UDの牽引役として位置づけられる米国の近況が報告されました。「21世紀のためのデザイン国際会議」を1998年ニューヨーク、2000年プロヴィデンス、2004年リオデジャネイロで開催など、常に先進的な取り組みをされています。

書体の UD



＜講演者＞河野英一（タイポグラフィック・デザイナー）

「『読む』技術を向上させるタイポグラフィーとは」

第一線で活躍するデザイナーから、書体デザインの歴史と最新動向が紹介されました。「New Johnston」をはじめとする河野氏の代表的作品の紹介を通じて、使用環境やデジタル化など要件の変化やUDに対する姿勢、美しく品位の高い文字を創り上げようとする氏の思いが伺えました。

生活用品の UD



＜講演者＞石井賢俊（ニドインダストリアルデザイン事務所代表）

60年代から生活福祉用品のデザインを中心に活躍し続けている工業デザイナーのパイオニアである石井氏の作品の根底にある理念は「人間の尊厳を守る」ために役立つデザインです。使いやすく自立度を高める排泄用具と食事用具のデザイン事例が紹介されました。

パネルディスカッション

持続可能な共生社会の実現へ向けて Part 2 ～行政の役割～



Part 1 が政治家セッションだったのに対し、Part 2 はそれを踏まえて行なわれる官僚セッションです。内閣府、総務省、経済産業省、そして静岡県のそれぞれのUD 関係部署から、所管事業紹介と将来ヴィジョン・方向性が紹介されました。

<コーディネーター>

佐藤章彦（内閣府政策統括官<共生社会政策担当>付 参事官補佐<総合調整第2担当> 下写真左端）

<パネリスト>（下写真左から2番目より順に）安間敏雄（総務省 情報流通行政局情報通信利用促進課長）、廣瀬 毅（経済産業省製造産業局デザイン・人間生活システム政策室長）、望月 正（静岡県くらし環境部県民生活局長）



特別セミナー（ランチョンセミナー）



パナソニック株式会社

「ユニバーサルデザイン～ひとにやさしいものづくり～」

パナソニックのUD の考え方、UD を支えるさまざまな技術、最新開発事例が紹介されました。



株式会社丹青社

「こころのユニヴァーサルデザインを共に考える」

社会交流空間づくりの領域で、「こころのUD」を共に考え、気づきを共有することをねらいとして、人にやさしいソーシャルデザイン、人にも環境にもやさしいデザインの最新事例が紹介されました。



富士通株式会社

Fun! Full!, Fujitsu UD Show「ピアノと朗読で綴る竹取物語～ユニバーサルデザイン今昔」

ピアノ演奏と朗読を楽しみながら、UD の今と未来を、参加者と共に考える来場者参加型のセミナーが行われました。

分科会（11セッション）：旅のUD、製品デザイン(1)・(2)・(3)、UD教育・普及啓発、デザイン手法(1)・(2)・(3)、ソーシャルデザイン、社会参加(1)・(2)、情報デザイン(4)

特別ワークショップ「48時間デザインマラソン」

「第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 in はままつ」のイベントのひとつとして、ユーザー参加型ユニヴァーサルデザインワークショップ「48時間デザインマラソン」が10月31日から11月2日まで、静岡文化芸術大学をメイン会場として開催されました

1日目



10月31日午前、参加者は静岡文化芸術大学に集まり、全員参加の事前会議を行いました。簡単な自己紹介を全員が行った後、監修者である金沢美術工芸大学の荒井利春教授から48時間デザインマラソンの概要が説明され、最後にデザインテーマが発表されました。「ユーザーの為にではなく、ユーザーとともに、明日のリアルなデザインを創出する」が今回のテーマでした。いよいよ48時間デザインマラソンのスタートです。デザインワークの拠点となる演習室に

移動してのランチョンミーティング、浜松の町並みに出かけて行っのフィールドサーヴェイ、夕食をとりながらの情報交流会と、初日のプログラムは順調に進み、チーム作業は21時に終了しました。

2日目

11月1日は8時30分からチーム活動が始まりました。メンバー各人の「気づき」を書いたカードをホワイトボードやスチレンボードに貼りながら、活発な論議が進められました。様々な気づきの中から、デザインのテーマを絞り込み、具体的なデザインに収斂させる作業が進みます。中



にはフィールドサーヴェイに再び出かけるチームもありました。演習室でのチーム作業はメンバーがそれぞれの役割を分担しながら進められ、チーム全員での検討によってデザインの方向性が決められていきます。異なる業種・経験・経歴が混ざり合い融合して新たなデザインが生まれていきます。さすがにチームが6つもあると、進行状況に大きな差が出てきました。順調に作業が進んで余裕の顔が多く見られるところもあれば、なかなか意見がまとまらず提案するデザインが決めらなくてあせっているチーム、そして既に具体的なデザインワークに取り掛かっているチームさえもありました。大学でのチーム作業は21時で終了し、ほとんどのチームが宿舎のホテルに戻ってからも作業をしていました。



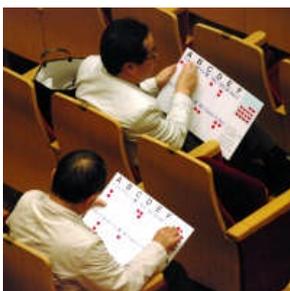
3日目

いよいよ最終日です。各チームとも午後の「公開プレゼンテーション／審査／表彰式」に向けて、作業もラストスパートに入りました。メンバーは皆、眠い眼をこすりながらも、プレゼン資料の作成・提案デザインのモック製作・ナレーションの練習など、思い思いの作業が進められました。締め切りの時間内で、全てのチームが提案デザインとそのプレゼン資料の作成を完了しました。残すはアクトシティ浜松・大ホールでの公開プレゼンテーション・審査・表彰式のみとなりました。

公開プレゼンテーション・表彰式



ワークショップに参加した6チームが順に、メンバー全員が壇上に登って来場者およびマスメディアに対するプレゼンテーションが行われました。各チームの発表に与えられた時間はわずか8分間です。2日間=48時間にわたる作業の成果を発表するわけです。提案されたデザインは、どれも素晴らしいものでした。大ホールへの来場者やマスメディア参加による公開審査が行われ、来



場者の投票によって「ベストデザイン賞」「ベストプレゼンテーション賞」が、また監修役の荒井利春教授および本ワークショップ実行委員会メンバーの審査によって、「チャレンジ賞」「未来技術賞」「チームシナジー賞」が決定されました。

参加者による投票の様子



<講評>

荒井利春（金沢美術工芸大学教授/48時間デザインマラソン監修）



<講評>

ジュリア・カシム（王立芸術大学院ヘレンハムリン上級研究員：英国/48時間デザインマラソン オブザーバー）



<表彰式>

ベストデザイン賞（Dチーム）



<振り返りの会>

国際会議の最終日11月3日にワークショップのまとめとして、参加者全員による振り返りの会が行われました。

11月3日（祝日・水曜日）

会議プログラムは大変幅広い領域で意義深い議論が展開されましたが、いよいよ最終日となりました。全体総括セッションに続き、閉会式では「国際ユニヴァーサルデザイン宣言 2010」が発表され、5日間にわたる全プログラムが終了しました。

この会議が最終的に成功したといえるかどうかは、議論した内容と熱い気持ちを持ちかえり、具体的な行動を起こし、実践につなげられるかにかかっています。今回の会議に参加された皆さん一人ひとりが得た知識や気づきなどにより、UD 社会への変革が少しでも前進することを期待しています。

パネルディスカッション・全体会議

ユーザー参加型デザインワークショップの意義と将来展望



IAUD が 2004 年より実施しているワークショップは、現在「48 時間デザインマラソン」となり今回で 6 回目。障がいを持つユーザーが参加するスタイルは回を重ね改善されてきました。その意義やプロセス改善の経緯などが運営責任者、監修、オブザーバー、ユーザーのそれぞれの立場から検証され今後の展開の可能性が議論されました。



＜コーディネーター＞藤井浩美（NEC マーケティング本部 UD・ブランド戦略室長 左上写真）



＜パネリスト＞（左写真上から）

秋谷英紀（トヨタ紡織株式会社クリエイティブスタジオ室長）

運営の現場責任者としてこのワークショップの企画・運営に携わった経験から、実績とプログラム内容、プロセスや運営方法の改善の経緯が紹介されました。



荒井利春（金沢美術工芸大学教授）

監修者の立場から、ユーザー参加型 UD ワークショップの意義と将来展望が述べられました。



ジュリア・カセム（王立芸術大学院上級研究員/英国）

ヘレン・ハムリンセンターでのデザインプロジェクトを中心に、世界各国での UD ワークショップ活動の事例が紹介されました。



太田啓子（財団法人たんぽぽの家/立命館大学 衣笠総合研究機構 客員研究員）

ユーザーの立場から、2006 年の京都の国際 UD 会議で 48 時間デザインマラソンに参加し衝撃をうけた経験、その後の UD ワークショッププロジェクトへの関わりなどが紹介された。ワークショップに参加するユーザーにも「評価する力」、「伝える力」、「提案する力」が必要とされると述べられました。

パネルディスカッション・全体会議

ソーシャルデザインマネジメント

このセッションは経営革新におけるデザインの関わりや意義を明らかにすることを目的として、日本感性工学会 デザイン&ビジネス研究部会との共同で企画されました。UD やサステナブルデザインの考え方を含めソーシャルデザインやソーシャルマーケティングの観点から経営のあり方やデザインマネジメントについて議論されました。



<コーディネーター>

竹川亮三（シンカデザイン代表/元ケンウッドデザイン株式会社代表取締役社長）
厳しい現状も日本のチャンスと捉え、MOD（Management of Design）の視点でデザイナーの力を活かし感性的価値を提供することが重要と述べられました。



<パネリスト>

河原林桂一郎（静岡文化芸術大学副学長/元株式会社東芝デザインセンター長）
バウハウスでの「ユニヴァーサルな」デザインをUDの源泉と捉え、ユーザー参加型のデザインプロセスや、ソーシャルイノベーションのためのファシリテーターとしての新しいデザイナー像が提言された。



和田精二（湘南工科大学教授/元三菱電機株式会社デザイン研究所長）
工学系の学校でデザインセンスのあるエンジニア輩出のため教育に携わってきた。障がい者のためのデザインのノウハウを活かしたサービス産業への展開の可能性が言及された。



川口光男（株式会社日立アプライアンス取締役/前日立製作所デザイン本部長）
企業の経営者のデザインに対する理解が不足している。モノからコトへとと言われるが、デザイナー全員がコトに向かうと逆に色・形というところが弱くなる。全体があまりにそちらに走り過ぎていないかと警告された。

経営におけるUD

もはやUDはデザインマネジメントの域を超え、重要な経営課題であるとの認識のもと、経営革新および産業活性化のためどのような問題があり、どう解決していくべきか。さらにソーシャルビジネスや社会的責任の観点から見た経営のあり方や今後の日本および世界の平和的発展に資するための方向性を探る議論が交わされました。



<パネリスト>

山本卓眞（IAUD 会長/富士通株式会社名誉会長）
IAUDに関わる経緯からはじまり、今後のUDの展望と経営者への期待が語られました。



戸田一雄（IAUD 顧問/元松下電器株式会社副社長）

日本の文化の中にある UD のベースとなる要素に関する持論の紹介から、製造業での UD についての思いのたけを述べられた。経営者にも高齢者の模擬体験を勧められました。



成川匡文（IAUD 理事長/東電環境エンジニアリング株式会社営業本部長）

UD の前にユニヴァーサルサービスという言葉で、電気という形のないものを売るため、お客さまにうまく電気を使っていただくための取り組みをしてきた。ユーザーでもメーカーでもない間の立場で、ユーザー視点の使い勝手をメーカーに提案するというスタンスが紹介されました。



＜コーディネーター＞

川原啓嗣（IAUD 専務理事/名古屋学芸大学大学院教授）

企業経営の視点として多様性をどのように取り組んでいけば良いかなど、今後の経営者として要求される視点や施策について、パネリストに問題を投げかけられました。

全体総括セッション・全体会議

未来の世代への遺言



「人と地球の未来のためにー持続可能な共生社会の実現に向けてー」のテーマのもと開催した今回の国際会議全体を総括し、特に強調すべき成果は何か、新たに明らかになった点は何か、また今後さらに議論を進めるべきポイントは何かなど、会議のまとめとしての話し合いが行われました。



＜講演者＞

ロナルド・ヒギンス（作家/英国）

話しの最後にイタリアの哲学者を引用され「思想は楽観でなくてはいけない。現実主義がいやだったら、希望を持った現実主義が必要だ。」と結ばれました。



ヴァレリー・フレッチャー（人間中心デザイン研究所所長/米国）

障がい者の人権を守るため障害者条約の果たす役割は重要、署名・批准する国が増えることへの期待と影響について語られた。また、こども UD コンテストの意義として、子供たち自身がいかに役割を果たせるか、いかに依存しあわなければいけないか理解することの重要性を強調されました。



ロジャー・コールマン（王立芸術大学院名誉教授/英国）

UD のコンセプトが日本に入ってから、ここ 12 年間でいかに発展したか。ヴィクター・パパネック氏の著書を紹介しながら、若者自身がこれから住む世界でもある今後の世代のためのデザインのため、若い今を楽しむ若者にいかに高齢者のことを考えてもらうかが重要課題であると述べられました。

成川匡文（IAUD 理事長/東電環境エンジニアリング株式会社営業本部長）

製品のデザインのみならず経営の視点、政治、行政の問題、教育・学校関係など、さらにグローバルと非常に広範、UD の取り組みの多様性に改めて驚き、大変勉強になったと感想を述べられました。



<司会進行>

川原啓嗣（IAUD 専務理事/名古屋学芸大学大学院教授）

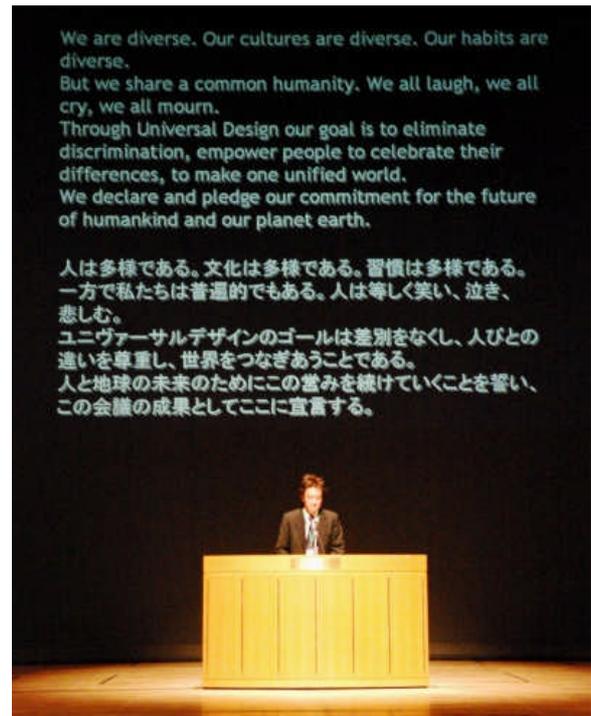
ヴィクター・パパネック氏の著書の中に、既に答えはある。専門家だけでなく「群衆の智慧」というのも案外正しい。明りは点いているので、将来に向け今から行動を起こしていきたいとまとめられました。

閉会式

山本会長あいさつに続き、パトリシア・ムーア氏から優秀論文賞 3 組の発表が行われました。



最後に成川実行委員長から会議全体の議論をふまえて「国際ユニヴァーサルデザイン宣言 2010」（次ページ）が読み上げられ、5 日間にわたる国際会議が閉幕しました。



We are diverse. Our cultures are diverse. Our habits are diverse.
But we share a common humanity. We all laugh, we all cry, we all mourn.
Through Universal Design our goal is to eliminate discrimination, empower people to celebrate their differences, to make one unified world.
We declare and pledge our commitment for the future of humankind and our planet earth.

人は多様である。文化は多様である。習慣は多様である。
一方で私たちは普遍的でもある。人は等しく笑い、泣き、悲しむ。
ユニヴァーサルデザインのゴールは差別をなくし、人びとの違いを尊重し、世界をつなぎあうことである。
人と地球の未来のためにこの誓いを続けていくことを誓い、この会議の成果としてここに宣言する。

第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2010 in はままつ 大会宣言

2002年、横浜から広がった小さな波紋は、世界中に共感の輪を広げ、ここ浜松に届いた。

ユニヴァーサルデザインの考え方が広く理解される以前、少数者のニーズは特別な方法で解決されるべきだと誰もが思っていた。

しかし私たちは今、一人ひとりのニーズは等しく尊重され、開かれた議論を通じて社会に包み込まれる形で解決されるべきだと考えている。

ユニヴァーサルデザインの考え方から多くの柔軟な発想が生まれ、人びとの創造性を刺激した。それは一人ひとりのニーズをもとにしてみんなを満足させる結果を導くための創造性である。

富の偏在、資源の枯渇、環境の悪化、持続可能な社会への転換と、解決すべき問題は数多い。

しかし、臆せず行動しよう。

私たちは、一人ひとりを見つめ、その人間性を尊重することが、世界規模の問題を見つめることにつながっていることを学んできた。

私たちは、一人ひとりの声なき声を拾い上げ、反映させていく社会システムを築かなければならない。ひとつの地域、ひとつの国にとどまらず、世界全体でその社会システムを共有する必要がある。

人は多様である。文化は多様である。習慣は多様である。

一方で私たちは普遍的でもある。人は等しく笑い、泣き、悲しむ。ユニヴァーサルデザインのゴールは差別をなくし、人びとの違いを尊重し、世界をつなぎあうことである。

人と地球の未来のためにこの営みを続けていくことを誓い、この会議の成果としてここに宣言する。

世界の UD 動向

賛助会員の磯村歩氏には本誌9月号で「パーソナルモビリティの可能性」と題してデンマークと英国の展示会をレポートしていただいたが、今回はドイツの展示会をご紹介します。



スティグマデザインからの解放

～「REHACARE International 2010」の視察を通じて～

株式会社グラディエ
代表取締役 磯村 歩

スティグマ (Stigma) の意 : 不名誉な烙印

上写真 : Otto Bock社「Avantgarde CS」

1. はじめに

日本で開催された「国際福祉機器展H.C.R. 2010 (以下 H.C.R. 2010)」について、あるTV番組では「車いすのまま乗降する電動バイク」「寝転がった状態で乗降する電動車いす」などの展示品を指し、福祉用具に“楽しさ”が感じられるようになってきた、としていた。確かに従来の福祉用具は機能一辺倒で素っ気のないものが多く“楽しい”などと身近に感じるものではなかった。ただ、こうした商品のあり方に加え、その訴求方法においても“楽しさ”を阻害する要因があるのではと思うのである。

10月6～9日(3日間)にドイツで行われたリハビリ及びケア関連の展示会「REHACARE International 2010 (以下 REHACARE)」(www.rehacare.com)を視察したが、従来の福祉用具の固定観念を変えうる、そして通常の一般製品とも思しき訴求方法が大変印象に残った。本レポートではその代表的な例をご紹介します。

2. 「REHACARE」の概略



福祉用具関連ではヨーロッパ最大規模といわれる「REHACARE」は、来場者52,500人、展示801社(29カ国)を誇る。会場はデュッセルドルフ空港からほど近い「Düsseldorf Exhibition Centre (North and South Entrance Halls 3 - 7)」で行われた。因に「H.C.R. 2010」は来場者119,451人、展示492社(15カ国)のようだが、「REHACARE」は展示規模に比べ来場者が少なく、ゆったりと見ることができる。日本の展示品は介護負担軽減のための用具類、ロボット技術活用、システムソリューションの展示が多いように感じるが、「REHACARE」では例年来場者の半分以上が移動補助機器に関心が高いことにあわせ、車いす、電動車いす、歩行補助車の展示が多いのが特徴だろう。さてここからトピック毎に訴求事例をご紹介します。

3. 外観デザイン、カラーリングの訴求

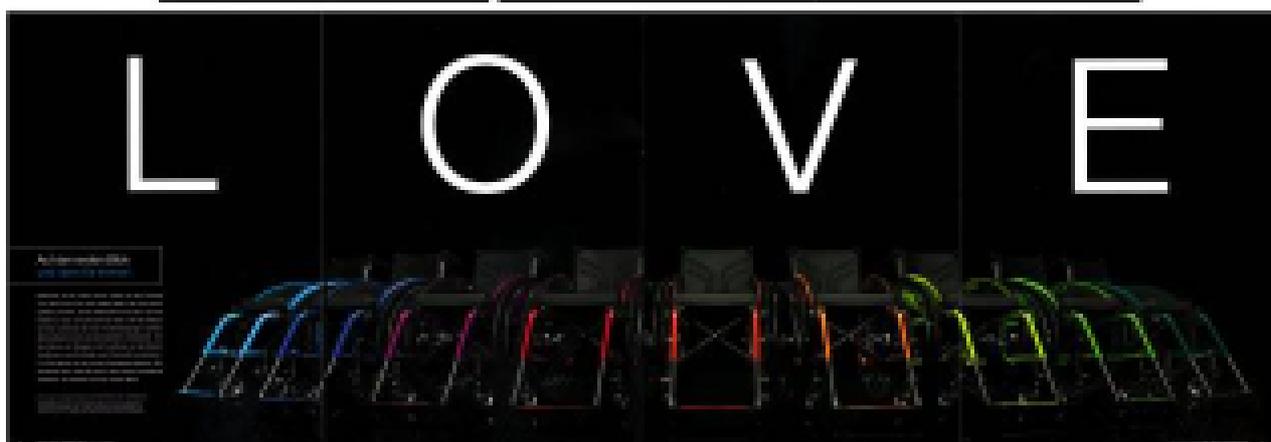
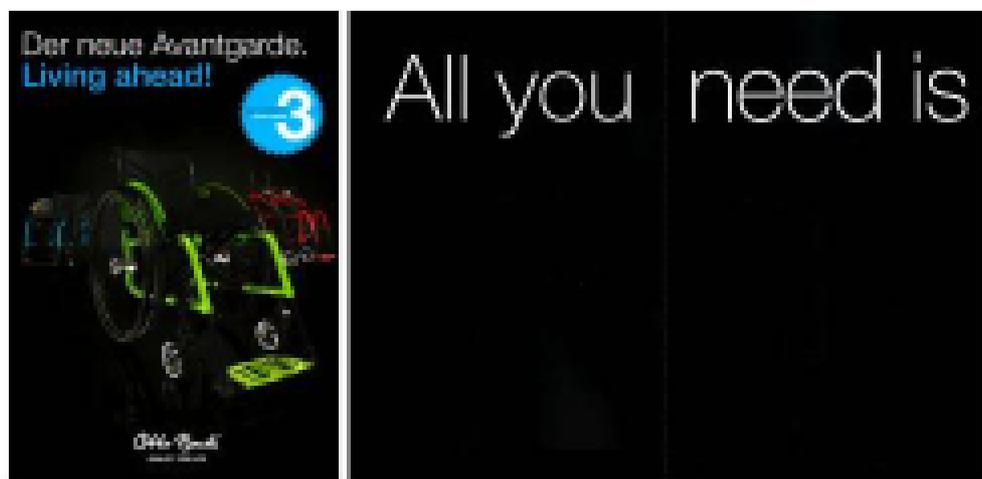


“デザイナー名”を展示ブース、カタログに記載し商品訴求に活用している事例だ。bischoff-bischoff社は歩行補助車(上左)に「ポルシェ デザイン スタジオ」、車いす(上右)に「ルイジ コラーニ」を起用したことを訴求している。Otto Bock社による「ドミニック ウォーン」を起用した車いす(下左)は市販化未定のプロトタイプだが、意匠性を高めた外観デザインはモーターショーのコンセプトモデルを想起させるものだ。多くの来場者が関心を向けていた。

HEWI社がリリースするサニタリー商品(下右)のカタログには、担当した外部デザイナーの外観デザイン、操作感に対するコメントが掲載されている。また各種デザインアワード(iF賞、Universal design consumer favorite2010他)を受賞するなど高い評価を得られているようだが、それ自体もカタログ、展示ブースに明記し商品訴求としている。黒基調の展示ブースはインテリアショーの様相で、従来の福祉用途のサニタリーとは一線を画すものだ。外観デザインもミニマル(単純で基本的な造形)にまとめられたインテリア性の高いものとなっている。



SunriseMedical社の子供向け車いすには、豊富なデザインのホイールカバーとシートカラーが用意されているが、まるで“おもちゃ”のような感覚で商品選択を楽しめるようになっている。そしてカタログ、スローガン「Explore your world」共に、よりアクティブに生活できる可能性を感じさせるものだ。



Otto Bock社がリリースする最新シリーズ「Avantgarde」は、カラーバリエーションを徹底的に訴求する。カタログの表紙を開けると真っ黒の背景に「All you need is」と次の“何か”を期待させるメッセージが現れる。そして更にメッセージをめくると「LOVE」というキャッチフレーズと共に9種類のカラーバリエーションが威風堂々と並ぶ。選ぶ楽しみを演出しているわけだ。ホームページには気に入ったモデルを任意の色を変えられる3Dシミュレーションも用意されている。(参照：<http://www.avantgarde3.de/de/start.html>)



立位に体位変換できる車いすをリリースするLifestand社は、その活用シーンをユニークかつ大胆に表現する。車いすユーザーにとって座位は多くの不便を感じているところだろう。こうして立位に簡易に移行出来るのであれば、生活習慣も大きく変わるのではないだろうか。そういう可能性を感じさせる商品訴求だ。ホームページ上にも数多くの活用シーンが掲載されている。(参考：www.lifestand.eu)



delichon社がリリースする「hippocampe」(上左)は、それぞれ2つ重なった左右のタイヤにより悪路での走破性向上が図られている。かつ防水仕様で海の中に入っても大丈夫な設計だ。各種アタッチメントも用意されており、フロントタイヤにスキー板を履かせれば、スキー場で楽しむことも出来る。「hippocampe」はホームページ上でユニークな活用シーンの訴求を行っている。「hippocampe」購入者がどこでどのように使ったかの写真を共有するサービスだ。「そんな使い方があるのか」、「そんな所にも行けるのか」という共有と驚きは、購入者同士の一体感の醸成に加え、新たな顧客に「私も使ってみるか!」と、その気にさせてくれるものに違いない。(参照：<http://www.hippocampe.co.uk/gallery.php>)

The EUROBIKE AWARD 2010を受賞したHase bikes社の「KLIMAX」(上右)は空力特性に優れた優

雅な形のウィンドブレーカーが装着されたモデルだ。総合カタログには様々なパーツが装備されたカスタムモデルが数多く掲載されている。またオリジナルデザインのバンダナ、Tシャツなどブランドロイヤリティを高揚させる商材も用意している。付属品の充実は、選ぶ楽しみに加え、カスタマイズによる満足感をも与えてくれるものだ。



Otto Bock社の立位リフト付ゴルフ用電動車いす「ParaGolfer」のカタログ（上左）は、開くとゴルファーが立位姿勢に変わるという立体絵本になっている。商品特徴をユニークに表現したものだ。topro社の「veloped」（上右）はもともとアウトドアユースの歩行補助車をゴルフ用途にカスタマイズしたものだ。クラブを収納できる専用バックを装備し、またウィンドブレーカーなど各種アクセサリも用意されるなど所有欲をくすぐる商品構成となっている。

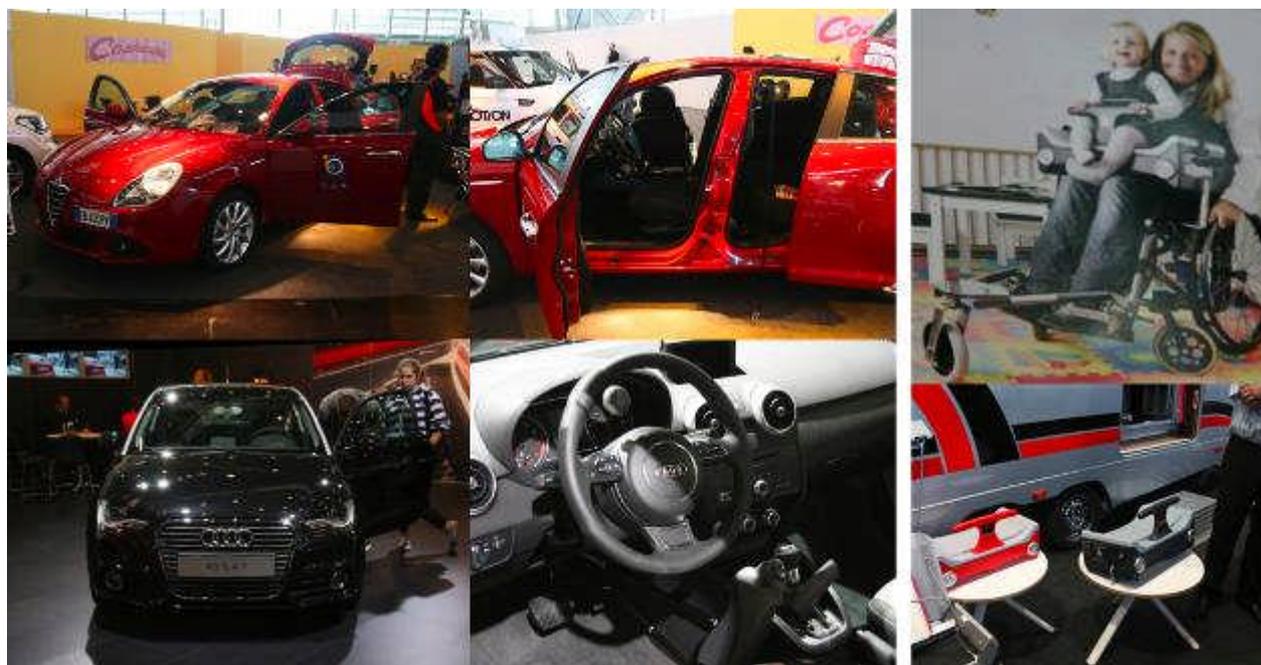
alber社の「adventure」（下左右）は四輪駆動、交換式大容量バッテリー、剛性を高めたフレーム構造によりアウトドア及び長距離走行に適したものだ。またスノーチェーンなどの多様なアクセサリも用意されている。カタログ及び展示ブースは大自然を感じさせる大きな写真を多用し、アクティブなアウトドアライフを想起させるものになっている。

5. アクティブマインドの訴求



Rollz International社の歩行補助車は手押し型の車いすに形が変えられるタイプだが、カラフルなボディー色とポップなブースデザインは従来のステレオタイプな高齢者向け訴求とは大きく異なる。ターゲットユーザー（高齢者）世代の若い頃であろう写真の大胆な扱い方は、まるで若さを取り戻せるかのような魅力的な商品訴求になっている。開発者は「21世紀のシニアは冒険心と好奇心に富み、可能な限り旅行を続けるもの。そうした新しい世代（The Next Generation of Senior）に向けた全く新しい商品だ」という。販促ツールも通常のカatalogに加え、飾っておきたくなるようなグラフィックデザインのADカード（上右）を配布するなど新たな訴求方法を模索している。HPも非常にポップで若々しいイメージだ。（参考：<http://www.rollzinternational.com/>）また、TwitterとFacebookを使った情報発信とユーザーとのコミュニケーションを図る取り組みもされている。

6. 最新のものがすぐに手に入る喜びの訴求、他



アルファロメオ ジュリエッタ（上左）、アウディ A1 1.4T（下左）などの最新モデルに障がい者用自動車運転装置が装着されていた。アルファロメオ ジュリエッタの後部ドアは車いす積載用

に前席側から開けられるよう改造されているが、簡易リフトが装備され、無理なく後部座席に載せられるものとなっている。また運転装置は取り外しが可能で、家族全員で車を共有できるような設計がされている。こうした最新モデルを福祉用具展に展示すること自体が非常に効果的かつ印象に残るものだろう。

最後に紹介するのは、車いすを使うママの子育てを支援するツールだ。これにより膝の上に安心して子供を載せられる。使用シーンを紹介する動画は、車いすのママが買い物、料理、掃除、洗濯などいろんな場面に小さな子供を連れていくものであったが、非常に微笑ましい清々しさを感じさせるものだった。以上、様々な訴求が試みられていることを感じて頂けたことと思う。

7. まとめ

日本の福祉用具の訴求は「朗らかで幸せそうな家族のイラスト」「商品特徴を絡めたネーミング（〇〇くん、〇〇ちゃん等々）」「パステルカラーによるやさしい印象」そして、多用されるキーワードは「やさしさ、ハート、シルバー、らくらく、らくちん」といったものであろう。それは供給者側の姿勢としては理解できるが、無意識下の同情が利用者側に垣間見えてしまわないか。誰しも自分を固定の枠に当てはめられたくはない。利用者にとって、そうした製品の使用は、その同情を追認するというStigma（不名誉な烙印）に陥るのではと思うのである。供給者の利用者への思いは、皮肉にも利用者に対する心理的バリアを作ってしまうわけだ。

共用品たるユニヴァーサルデザインは障がい者・高齢者向けと悟られないように外観デザイン、商品訴求を丹念に作り上げ、その中には成功例もある。同様に専用品たる福祉用具においても、引け目を感じないポジティブなデザインと商品訴求による“スティグマデザインからの解放”が必要なのだ。そうであってこそ、本当に利用者の立場にたったのだといえると思うのである。

さあもっと“カッコいい”ものを作ろうじゃない。

以上

■「第5回ユニバーサルデザイン全国大会」佐賀県嬉野市で開催

全国で広がるユニバーサルデザインの先進的な取り組みの紹介・情報交換などを通じ、より一層のユニバーサルデザインの普及・推進を図ることを目的としたUD全国大会が佐賀県嬉野市で開催されます。



開催概要

- ・名 称：第5回ユニバーサルデザイン全国大会
 - ・会 期：2010年12月21日（火曜日）～22日（水曜日）
 - ・会 場：佐賀県嬉野市公会堂、和多屋別荘、大正屋、和楽園、華翠苑
 - ・主 催：ユニバーサルデザイン推進自治体連絡会、佐賀県、嬉野市、(財)自治総合センター
 - ・後 援：内閣府、総務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省
 - ・協 力：第5回ユニバーサルデザイン全国大会嬉野市実行委員会
 - ・大会キャッチフレーズ：優・YOU・湯～まんなかにあなたがあります。佐賀のユニバーサルデザイン
 - ・参加申込み締め切り：2010年11月30日（火曜日）
- 参加申込み、大会のプログラム、関連企画、大会へのアクセス、宿泊申込みなど、詳しくは以下のサイトをご覧ください
<http://www.saga-ud.jp/taisei/conference/index.html>

■「include2011」開催

RCA ヘレンハムリンセンターからインクルーシヴ・デザインの第6回目の国際会議「include2011」の開催概要が発表されました。



開催概要

- ・会 期：2011年4月18日～20日
- ・会 場：王立芸術大学院（RCA）ロンドン・英国
- ・テーマ：The Role of Inclusive Design in Making Social Innovation Happen
(ソーシャル・イノベーションを起こすためのインクルーシヴ・デザインの役割)

ソーシャル・イノベーションは社会、政府、学術関係、およびビジネスの領域で重要性を増しています。それはさまざまな文脈においてそれぞれ異なった方法で現れます。その意味するところは公共サービスや政策革新から、支援技術のイニシアチブへと、そして市民参加や創造的企業家精神の局面へと広がっています。

これらすべての領域で、デザインが重要な役割を担っています。デザインが政策を可視化することで、市民参加が可能になります。

特に、インクルーシヴ・デザインは社会的価値の革新を共同体と市場にもたらします。

RCAでの「include2011」国際会議では社会的な革新を促進するあらゆるデザイン分野の論文を募集します、特に：

- 組織・しくみ；どんなデザインツールや、技術、フレームワーク、およびネットワークが、社会的革新をサポートし促進させるか？
- 起源；社会的な革新はデザイン構造物としてどのように現れるか、そして、それはどんな風に現れますか？
- アウトプット；公共スペースや、健康、輸送、その他のかぎとなる領域から得られた、社会的

革新の研究やデザイン事例の調査

「include2011」は特にインクルーシヴ・デザインとソーシャル・イノベーションの直接的な因果関係について調査する論文を求めています。

●詳細は以下のサイトをご覧ください。

<http://www.hhc.rca.ac.uk/2968/all/1/include-2011.aspx>

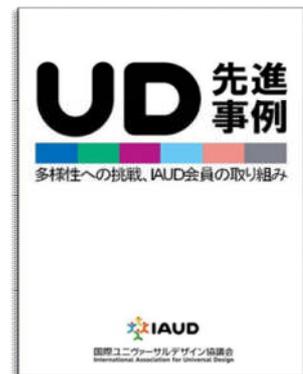
■「UD先進事例 多様性への挑戦、IAUD会員の取り組み」電子書籍で発刊！

幅広い領域にまたがるIAUD会員の先進的な取り組みが一冊の本になりました。

本書は、IAUD会員向け月刊誌「IAUD Newsletter」で約2年半の間に掲載された32社・団体の取り組み記事をもとに一冊にまとめたものです。

また、本書オリジナルコンテンツとして静岡文化芸術大学の河原林桂一郎副学長に『企業や社会におけるUDの動向と今後の方向性』と題して書き下ろしていただきました。

UDの原点は多様なユーザーを理解することであり、対象が多様であることは同時にアプローチも多様になりますが、本書は、さまざまなデザイン領域の基本事例として、また企業経営や商品企画にUDやダイヴァーシティの考え方を取り入れるための参考事例としてなど、幅広くご活用いただけます。



<主な内容>

推薦の言葉：「人にやさしい」からはじまるイノベーション

経済産業省製造産業局デザイン・人間生活システム政策室長 廣瀬 毅

第1章 企業や社会におけるUDの動向と今後の方向性

静岡文化芸術大学副学長 河原林 桂一郎

第2章 UD先進事例（32社・団体）

掲載企業・団体（本書掲載順）：東京電力、パナソニック、富士通、日立、トヨタ自動車、TOTO、リコー、岡村製作所、日産自動車、大日本印刷、東芝、三菱電機、イトーキ、積水ハウス、コクヨファニチャー、INAX、丹青社、博報堂ユニバーサルデザイン、静岡県、リムコーポレーション、東洋インキ、セイコーエプソン、東急車輛製造、ダイワハウス、アップアローズ、浜松市、静岡文化芸術大学、ユニバーサルイベント協会、ヤマハ、ユーディット、NEC、バンダイ

※本書をご購入いただいた方で、視覚障がいやディスレクシアなどの特性により、読み上げ可能なテキストの電子データ（.txt で作成）を必要とされる方にテキストデータをご提供させていただきます。詳しくは本書 巻末の【テキストデータのご案内】をご覧ください。

●本書はオンライン書店 shinanobook.com にてお求めください。

価格：1,890円（定価1,800円＋税）

A5判 256ページ

出版社：株式会社UDジャパン



●問い合わせは 国際ユニヴァーサルデザイン協議会 事務局まで

【編集後記】○鍋の季節です。大好きな魚と野菜をたくさん食べられ、後は美味しい雑炊にさせていただくことが出来ます。お酒も本当に美味しくなります。有難い季節になりました。先日、家族旅行で愛知県に行った際、「クエ」を食べる機会に恵まれました。福岡県では「アラ」と呼ばれ、フグよりも高級魚と言われています。夕飯のためにたまたま入ったお店の大きな生簀に、かなり迫力のある姿をした大口の魚が泳いでいました。それが「クエ」でした。何年も前に食べたことがあったのですが、姿を見たことはありませんでした。お店の方の勧めもあって、大人 8 人でいただくことになりました。大型魚であること、潮の速い岩場に群れをなさずに棲みついでいて多く獲れないことなどから幻の魚と言われており、かなり高価でもあります。また1匹単位で全て食べきらなければならないこともあって、大人数でなければ食べるチャンスが巡ってこないそうです。今がそのチャンスだと言うのです。ふぐ刺しと同じように紅葉おろしとポン酢で食べるのですが、良質な白身魚の旨みとコクは、ふぐより少し脂ののりもあってお肉では味わうことのできない感覚でした。刺身の後はクエ鍋です。少し薄く切った身をしゃぶしゃぶにさせていただきました。熱が加わることでさらに美味しくなります。他では味わえない味と食感です。身を取った残りは、頭と一緒に煮付けいただきました。うまく箸を使って格闘すると、コラーゲンたっぷりの身が現れます。骨にこびりついた身もかなり美味しいものです。鍋の後のお出汁を使った雑炊をいただきながら、食べました。ふぐと比べると、どちらの方が美味しいのかなという声が聞こえそうです。優劣つけがたく、どちらとも言えません。確かなことは、一緒にいただくお酒が一番美味しいことかなと思います。(矢)

○駅の券売機で IC カードをチャージしようとしたのですが、たまたまその機械はカードをスロットインせずホルダーに置くだけのタイプで、チャージ後、カードが自動的に出てくるのをしばらく待っている自分に気づいてハッとしたことがあります。笑い話として自動ドアでもないのに開くのを待っているというのはよく耳にしますが、便利なものが当たり前になることには注意が必要です。東京都健康長寿医療センター研究員の矢富直美先生は高齢者の認知症について、医学的見地だけでなく、予防プログラムや地域コミュニティでの取り組みなど、広い観点で向かい合ってこられた方です。トレーニングや機器・サービスの利用する際、障壁を取り除き過ぎないで適度に負荷を残し、モチベーションを重視する、IAUD のプロジェクトでいう「UD プラス」に通じる考え方を「バリア・フリー」と称して推奨されています。歩道に段差がなくなったりエレベーターやエスカレーターの設定が進んだりすることは大変良いことですが、それを利用する人の側の姿勢の問題も大切です。便利なものや楽なものに頼り過ぎず、積極的に自分の頭と体で考え、行動することを常に忘れないようにしたいものです。(薦)

IAUD Newsletter では、誌面を会員の皆さまの UD に関わる情報交換の場と位置づけています。ぜひ、会員企業の UD 商品開発事例や PJ/WG の活動成果事例等の情報をお寄せください。また、国内外の UD 関連イベント、シンポジウム等の開催情報もお知らせください。ご連絡は、news@iaud.net へ直接、メールをお送りいただくか、事務局あるいは情報交流センターまでお問い合わせいただいても結構です。

無断転載禁止

IAUD Newsletter vol.3 No.8
2010 年 11 月 25 日発行
国際ユニヴァーサルデザイン協議会

事務局 : 225-0003 横浜市青葉区新石川 2-13-18-110
電話: 045-901-8420 FAX: 045-901-8417
e-mail: info@iaud.net
情報交流センター: 104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9
(IAUD サロン) トヨタ八丁堀ビル 4 階
電話: 03-5541-5846 FAX: 03-5541-5847
e-mail: salon@iaud.net